慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	セシリー・マクワース「マラルメのイギリス講演」（翻訳）
Sub Title	Lecturing in London: Mallarmé de Cecily Mackworth : traduction
Author	Mackworth, Cecily(Harayama, Shigenobu) 原山, 重信
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.47 (2008.) ,p.69- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080930-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

セシリー・マクワース「マラルメのイギリス講演[a)]」（翻訳）

原　山　重　信

「〈思考〉のために建設された大理石の〈都市〉[b)]」
――オックスフォードとケンブリッジにおけるマラルメ

一方マラルメは、テイラー・インスティチュート[c)]の名義で、シャルル・ボニエ[d)]を通じてヨーク・パウエル[e)]の招待を受けていた。彼の最初の反応は、異なる言い方で表現されてはいたが、奇妙にヴェルレーヌの反応に似ていた[1)]。

親愛なるボニエ様（と彼は書いた）。このところ、『ワルキューレ』、メーテルランクの『ペレアスとメリザンド』、そして今にも起ころうとしていることの気配への漠とした思いから、返信が遅れることになっておりました。しかしヨーク・パウエル氏によって加えられた厚遇のお申し出は、とても魅力的で私を感動させるものですので、主題に関してではないまでも（というのは殆ど私自身の考える主題を超えることは決してありませんので）、講演のタイトルを決めるまで待たずに、私の心からなる彼への謝意をお伝えいただけるよう請いたいという気持ちになるほどでした。それは「文学と音楽」ということになるでしょうか？　フォンテーヌブローの木陰で数日の間これについて熟慮し、ほどなくヨーク・パウエル氏への手紙をあなたにお届けする所存です。それまでは全く私共の内輪のこととして、そしてどなたへも一言も漏らすことなく、友人として是非私におっしゃって下さい。もしこれ自体としては心をそそられる、このわくわくする計画にまつわる金銭的な条件があるのでし

ょうか。また、どのように〔支払われるのか〕、など。

私はその頃はもう退職しているはずですので、なすべきことが山ほどあり、きちんと旅行する状態でありたいのです。〔1893 年 5 月 20 日付シャルル・ボニエ宛書簡〕

音楽と詩の関係の問題は、ここしばらくの間まさしく詩人たちの心を占めてきていた。「香水、色そして音が答え合う[2)]」、しかし正確にどこに（と詩人たちは自問していたのだが)、これら異なるタイプの知覚の間の、音と意味の間の限界があったのか、そしてそもそもその限界は存在したのか、すべきなのか？　そして本当に、「内在する音を表現する同じ必要性に存するというその原理において、そして想像の喜びの状態を表象するものであるというその目的において同一のものである[3)]」二つの芸術の間の違いは何なのか？　自らの詩が時として殆ど音楽の領域を侵犯するように見えるマラルメは、勿論詳細にその問題に関して省察した。

彼は 1893 年の間、ラムルーのコンサートに足繁く通い、そこに美的な楽しみより遙かに大きな精神的苦悩を見出していたのだ。少なくとも 1 回彼と同行する機会があったポール・ヴァレリーは、それがどのようなものであったのか述べている[4)]。

偉大な芸術家として、彼の心は、抗議と、純粋な音の神々が彼らなりに言い表し、発音し得るようなものを解読するという努力とに満ちていることだろう。マラルメは、崇高な嫉妬心でいっぱいになって、〈音楽〉が強力になりすぎて我々の芸術〔＝詩〕から盗みとった驚異と重要性とを、我々の芸術のために奪い返す手段を絶望的に探し求めて、コンサートをあとにするだろう。

この講演の見通しは、その主題の自由な選択によって、彼の考えを系統立てて述べ、まず第一に彼自身が納得するために、音楽と詩の間の本当の、曰く言い難い関係は何なのか発見しようとする励みにもなり、またその好機で

もあった。

招待は前以て運良くやってきた。そして、論述を準備するまで彼には何箇月もあった。その間に、ヴェルレーヌの成功の知らせが文学界に漏れ伝わっていて、ローマ街にも届いた。ヴェルレーヌとマラルメは、外向的なのと内向的なのとで気質的に両極端であり、彼らの生活の仕方はこれ以上異なるものは殆どないほどだった。しかし両者は、めったに会うことはなかったが、お互いを心から愛していた。(ヴェルレーヌは確かに、少々後に、マラルメとフランソワ・コペーが常に自分に誠実だったたった二人の友人だと述べた。)そこでマラルメは、何か有益な情報を見込んでヴェルレーヌの跡を辿ろうとし始めた。しかしながら彼はいつもよく居る場所の何処にも見つからなかった。この頃、彼をビストロから離して家に留めておく方法を知っている、恐ろしいウージェニー・クランツと暮らしていたからである。そうこうしている間に時間が迫ってきた。そこで一通の手紙がロンドンに向けて発せられた。

> さあ、親愛なるゴス様、私は或る情報を求めて書いています。お願いですから、葉書で教えて下さい。ロンドンで一番評判のいい講演用のホールはどこですか。それから、もしその種のものが存在するのなら代理人の名前も教えて下さい。今パリにいないので消息がつかめないヴェルレーヌが、この前の冬どこかで講演したことを私は知っています。私自身、テイラー協会(アソシエーション)からの招待にお答えして、2月末にオックスフォードに参ることになっていますが、ロンドンを通りかかる際、受けを少しは期待することが望めそうな講演をもう一度できたら嬉しいことでしょうが。私にとってまず重要なのは(この追加の計画は別として)、昔からの知己と握手ができるこの思いがけない機会なのです。まず真っ先にあなたと、親愛なるゴス様。〔1894年1月18日付書簡〕

マラルメはヴェルレーヌほど幸運には恵まれなかった。或いは恐らく友人たちは彼の文体が公衆向けの講演にはあまり向いていないと考えたのだろう。

いずれにせよ、ロンドンでは彼のために何も手配されなかった。しかしながら、旧友のチャールズ・ホイブリー[f]によってケンブリッジで2回目の講演が企画された。彼の兄のレナード[g]がペンブロウク・カレッジの教授だったのだ。彼は恐らく少々うろたえたが、とやかく言わずに承諾した。多分、「私がオックスフォードと言う時、ケンブリッジを意味するのだ。というのは、訪れる蛮人は、その違いを知っている必要は全くなくて、知ったかぶりをすると、その人がとても学者ぶった、そしてとても気立てがよい人であるように突然感じられてしまうのだ[5)]」と言うヘンリー・ジェームズに賛同したのだろう。

マラルメは、出発の時が近づくにつれて、ヴェルレーヌよりもなおいっそう取り乱していたように思われる。確かに彼は、そのための準備をするのに非常に難儀し、2月末頃、メリー・ローラン[h]に向けて「講演のための原稿が遅れているのです。ちょっと気がかりで、家を出られません」と書くのを我々は見るのである。題目は結局『音楽と文芸』が選ばれ、ヨーク・パウエルが、弁士によって読まれるべき翻訳をすることが合意された。パウエルのアクセントは、彼のフランスの友人たちから広く賞賛されていたのだ。2月21日に、『オックスフォード・マガジン』誌はその講演をかなり単調で、熱のない言い方で告げている。

> 来週の間テイロリアンで講演するマラルメ氏は、彼の詩のうちの1篇を再掲することを快く許可してくれた。天分に恵まれた詩人として高く評価されてはいるが、マラルメ氏はあまり著作を発表せず、彼の作品の公認の版は入手が容易ではない。久しく英文学の研究に一身を捧げてきたという点において、イギリスの聴衆に対して一つの特別な資格をマラルメ氏は持っているように思われるだろう。そして、彼のよく知られた散文で書かれた出版物の幾つかは英語から翻訳されたものである。

その詩とは「L. D.」（恐らくルイス・ダイアー[i)]）による「ためいき」の翻訳であった。この詩はマラルメがまだ高踏派の影響下にあった頃、多分ロ

ンドンで書かれたきわめて初期の詩篇である。

モンドール博士によれば、彼は1894年2月27日にオックスフォードに到着したが、その日より前にイギリスにいたようだ。パリからエドマンド・ゴスに向けて「来週水曜日にオックスフォードで、金曜日にケンブリッジで講演しているでしょう。その間「サセックス・ベル」という名でしか知らない場所の、友人宅に滞在するつもりです」〔1894年2月24日付書簡〕と書いたからである。その友人とは、チャールズ・ホイブリーであることが明らかにされている[6)]。この頃まだ有力紙『ナショナル・オブザーヴァー』の編集長で、マラルメ、ヴェルレーヌ、シュウォブとその他の現代フランス作家をイギリスの読者に紹介していたW. E. ヘンリー[j)]の同僚であった。ホイブリーはと言えば、本当にただ文学の周辺にいただけである。本来ジャーナリストであり、彼の出版作品はこの当時イングランドとウェールズの大聖堂案内と、『ケンブリッジの機知の三世紀』という題名の文集に限られていたのだから。しかしながら彼はホイッスラー[k)]の義弟であり、この事実こそが、彼〔ホイブリー〕がパリの『ポール・モール・ガゼット』の記者を務めた数年間多くの扉を開いていたのだった。最初に彼〔ホイブリー〕をローマ街に連れて行ったのはホイッスラーであり、これまで誰も完全にわかっていたとは言えない何らかの理由のために、彼とマラルメは堅い友人になっていた。この二人ほど似ていない人たちもあり得なかったろう。ホイブリーは、自分の言いたいことをそのまま述べ、ばかげたことをしない、単純で真っ直ぐな類の人間であることを自慢しており、マラルメの詩は言うに及ばず、どんな種類の詩も殆ど理解しているようには見えなかった。しかしながら、この詩人の作品の真価を理解できずに、その人としての魅力にとらわれた人は彼一人ではなかった。

匿名の友人が彼の死亡記事のなかで次のように書いているように、「チャールズはマラルメが自分の神経の過敏さを蔽い隠すために設けた無垢の見せかけの障壁をどういうわけか突き破ってしまったに違いない。芸術も彼らは共通に持っていた。ホイブリーの芸術はその見かけの容易さゆえに理解されないが、マラルメのはその考え抜かれた難解さによって理解されない[7)]。」

いずれにせよ、マラルメがほぼ20年ぶりにイギリスに着いた時、真っ先に向かったのはホイブリーのところだった。彼が地名だと勘違いした「サセックス・ベル」というのは、実はヘイズルメア[l)]のホイブリーの家の近くにある宿屋だった。そしてマラルメはそこに24日の夜、そしてもしかしたら26日まで宿泊したのだった[8)]。この逗留については残念ながら何も知られていない。しかしヘンリーは厄介な自分の新聞への寄稿を検討したものと思われる。それに関して、彼は一語たりとも理解できず、それが「真っ赤な欺瞞」だと感じたと告白しているのである。

2月27日付[m)]の手紙は、彼〔マラルメ〕が少なくとも前日からはヨーク・パウエルの歓待を喜んでいたことを示している。

> オックスフォードは驚異だ（と彼は娘のジュヌヴィエーヴに知らせた）。20かそれ以上の絶妙に中世風の修道院が広場と水の間にあり、街や人さえ存在しているのだが、みんなそれを忘れている。窓の下に雌牛、鹿のいる野原があり、樹齢何百年という木々もあるが、葉叢が切れたところは塔がちらちらっと点在しているのが見える[n)]。昨日、日向でこんなものを皆たくさん見物し、大聖堂のように素晴らしい大食堂で夕食をとった。そこでは卒業生の有名人の肖像が吊るされた羽目板の上に長いガス灯のコードが伸びている。ここに献立表がある……それをお前たちのために祝宴のテーブルから失敬した。それから僕たちはホールで1時間過ごしたんだが、そこで教授たちは、シャープスカ〔第二帝政下の騎兵が被った帽子〕と吸取り紙の中間の何かみたいなあの奇妙な帽子と共に、食事中は着ている礼服を脱いだ後、いろんなワインを飲むんだ。

一方、マラルメとヨーク・パウエルは既にお互い昵懇（じっこん）の間柄になっていた。外見上は、小柄で物静かで控え目なマラルメと、人生が与えるはずのあらゆるものに好奇心を抱いて受容れる、巨大で賑やかなパウエルとの対照ほど大きな対照は、なかなか見出すことはできなかっただろう。しかしそれでも、彼らの間に沸き上がった共感は、並みの文学愛好よりも遙かに深くまで

進んだのであり、恐らくその元は、この二人の不可知論者のおのおのが、信心深い気質を持っていたという事実にある。シャルル・ボニエは、愛し敬服するパウエルについて書いて、彼の無神論は「偉大な神秘主義者たちのそれに似た平静を彼に付与した」が、彼の特殊な形の神秘主義は「知識に向かっての果てしない突進[9)]」だったと述べている。パウエル自身、彼が本当に愛したたった2冊の本は、〔トマス・ア・ケンピスの〕『キリストの倣び(イミテーション)』と聖アウグスティヌスの『告白』だと認めている。その理由は、彼が言うには、これらの書が「我意の放棄、苦しみへの愛、禁欲」を賞揚しているからだという。マラルメの詩への献身は同種のものであって、パウエルの知識への献身がそうであったのと同様に深く、絶対的なものであった。

こうした並外れた特質をもった二人の間に起こったことについてもっと知りたいと思われるだろうが、彼らの談話は記録に残っておらず、彼らの書簡の遣り取りはまだ公表されていない。我々が知るのは、彼らがお互いを好きで、真価を認め合っていたということだけである。「我々は泥棒と同じくらいとても親密だ〔「非常に親密だ」という意味の慣用表現〕」とパウエルは書いている。「彼〔マラルメ〕は奇妙なパリ人の最も愉快な思い出話で私を笑わせてくれた。彼は美しい洗練された物腰と話しぶりを身につけた魅力的な男だ」と。そしてマラルメの死後、彼〔パウエル〕は来客〔マラルメ〕が、自分が知った全ての偉人に特有だと認める純真さを持っていたことを思い出していた[10)]。

恐らく話しをする時間はあまりなかっただろう。というのは、講演は3月1日と広告されており、なされるべき仕事がたくさんあったからだ。パウエルは原文の翻訳を引き受けていたのだったが、『音楽と文芸』の分厚い手書き原稿は、立派に磨かれ、長くて、難しく、まわりくどい言葉遣いで、さぞかし彼の予想を越えたものだったに相違ない。彼の客〔マラルメ〕が、オックスフォードの周りを見せるべく、ベイリオルから来たギリシア語学者のルイス・ダイアーに引き合わされたのは、多分彼〔パウエル〕がこの殆ど超人的な務めに取り掛かっている間のことだっただろう。彼らはどんよりした雨の朝、いろんな学寮とボドリーアン図書館を見学し、ダイアーはパリの友人

のアリドール・デルザン[o)]に向けて書いた。「何という独創性、そして何という深さでしょう。彼の会話は幾つかの点で彼の書いたものよりもさらに面白いと思いました[11)]」。

ウォルター・ペイター[p)]が昼食に招かれていた。それは当然の選択に思えた。というのも、ペイターの作品は、少なくとも意図においては、他のどのイギリス作家の作品よりもマラルメの作品に恐らく近かったからだ。それに彼は、オショーネシーが死ぬまでその友人だったのと同様、ジョン・ペインの友人だった。二人は話すべきことがたくさんあったに違いない。しかしペイターとの連絡は悪名高く困難だった。自分自身の醜さに悩まされて、彼は殻に閉じ籠って久しく、ほんの僅かの人しか彼に姿を現すよう促すことはできなかったのだ。彼はフランス語が完璧にわかっていたが、人前で敢えて話そうとはせず、彼の内気さはマラルメに影響を与えたものと思われる。彼〔マラルメ〕は突然英語が話せないと思ったのだから。だからパウエルが、英語と、正しいというよりは流暢なフランス語を使い分けて話している間、彼らはお互いを見つめ合いながら、じっと黙って座っていたのだ。

恐るべき翻訳が、克服できない困難の数々を示していた。マラルメは助けと説明を要求されていた。二人は働き、パウエルは今度だけは自分の務めに集中した。実際彼は客〔マラルメ〕をとても過酷にその仕事にとどめたので、翌日マラルメが、パリのメリー・ローランにメモを走り書きしたくなった時、講演の準備のために口髭をカールするという口実でこっそりと立ち去らなければならなかったほどだ。

彼らはその晩殆ど徹夜して、マラルメはますます神経質になった。結局彼は本文を英語で読めない気がすると言い放った。彼はフランス語で講演し、パウエルがその後に英語版[12)]を読んでいくことになった。その解決法は、恐らく最適の結末として採用されたわけではなかった。なぜなら、ダイアーによる英訳は、フランス語原文よりも遙かに理解し難かったからである。

講演は、午後、テイラー・インスティチュートで行われた。マラルメは、「いつものように落ち着いた服装をして、ぞんざいなだけなのはダメ[q)]。私たちはお父さんを見回して、講演者に充分相応しい姿かどうか見てくれる

人を誰か見つけるように敢えて勧めはしないけれど、そうしたほうがいいわ。鏡が助けになってくれるかもしれないわね」という娘の忠告を心に留めていた。彼はさだめしオックスフォードのエリートの華やかな集まりを想像していたのだろう。現実はがっかりさせるものだった。

> おお、こんなこととわかってさえいたら！（と彼は翌日マリーとジュヌヴィエーヴに知らせた）2、3 人の教授、数人の学生、残りはみんなご婦人方だ。文句は言わないよ。みんな完璧に振舞ってくれたからね。長い時間礼儀正しく拍手喝采してくれたし。最後はちょっと惰性的にだったけどね。でも難しい美学の作品を伝えに僕はここまでやってきたんだ。それなのに、何も準備なしで話したほうが良かったのかもしれなかった。昼間に何も食べずに、モーニングコートまで着て……こんなに遠くまで来て、勉強好きか、それともただちょっとフランス語を聞く機会を捕えた 60 人くらいの社交界の人たちを楽しませるのにこんなに悩んだのが妙な感じだ。〔1894 年 3 月 1 日付書簡〕

『音楽と文芸』は本当に「難しい美学の作品」であって、聴衆がこれは困惑させるものだと感じたからといって責めを負うことは殆どあり得ない。アーサー・シモンズは、聴講していた或る新入生が、帰り際に「単語は全てわかりましたが、文は一つもわかりませんでした」と述べたことを伝えている。ルイス・ダイアーはと言えば、そう決め込むのは難しいと考えた。

> マラルメ氏はフランス語で我々に話しをしてくれたが（とアリドール・デルザン宛の書簡は続く）、手際よく我々のレベルまで落としてくれたので、ヨーク・パウエル氏よりもよくわかった。幾人かは、彼の美しいリズムのある優雅な語り口のことを感心して私に話してくれた。しかしそれでも古いオックスフォードの人びとはその斬新な文体に聊か戸惑ったことは認めざるを得ず、人びとは一言もわからないとこぼした。我々はただ、それを印刷しなければならないだけだ。

マラルメがしかつめらしく口の端に掛けて、「実際、ニュースを持って参りました。この上なく驚くべきニュースです。……詩句に手をつけてしまったのです」と告げ（というのは、これは本当に彼の存在の、まさに核心そのものに触れたものだったからなのだが）、難解で優雅な手の込んだ表現で、さらに論旨を展開して、慎ましやかに、意気揚々と、この凡庸な聴衆を前にして、30年間の省察の成果を要約した「〈音楽〉と〈文芸〉は、それぞれ、後者は闇の方へと拡がり、前者は明証性をもって光り輝く、一現象、それは唯一のもので、私はこれを〈観念〉と名付けたのですが、この現象の交互に現れる面なのです」という結論に達した時、オックスフォードの聴衆には、どうやら通じないままだったようだ。

彼に敬意を表して昼食会が催されたが、その後で彼はシェリー酒とシャンパンを飲まされた。共に体質に合わないものだったので、マラルメは「私にとって母親のようだったあの素晴らしいヨーク・パウエル」という「3日間の、そして永遠の友[13)]」に別れを告げた。彼は夜遅くロンドンに着いたのに違いない。しかし若い頃の「兄弟」だったジョン・ペインは彼を待っていてくれた。「〔こちらに来て〕初めてのビールの1杯を飲めるのは何という喜びだろう！」〔1894年3月1日付書簡〕とマラルメは家に手紙を書いた。しかしながら話しをする時間はあまりなかった。というのは翌日ケンブリッジに行って、同じ講演を繰り返すことになっていたからだ。

出発する際、彼は最高の上機嫌というわけではなかった。なぜなら彼はパリで心配して知らせを待っている家族に「ホイブリーのあらゆる好意にもかかわらず、それは大きな収益にはならないのは確かだ」〔1894年3月3日付書簡〕と説明しているからだ。

彼は正しかった。というのは旅回りの芝居一座がその夜、競合する呼びものを企画しており、1人5シリングの入場券はたった20枚しか売れなかったからだ。とはいえ、聴衆の質が量の埋め合わせをしたのだった。

> 我が哀れな留守番の者たちよ、もしお前たちがいなくて残念に思うようなことがあったとしたら（と彼は翌日マリーとジュヌヴィエーヴに向

けて書いた)、それは昨日の晩だ。どんな講演も未だかつてこんな稀少性と美しさの印象を私にもたらすことはなかったし、これからもそうだろう。夢見ることができる以上のものだった。聴衆の20人――そのうち2人はご婦人だ――は純然たるエリートで、慎み深いのと同時に友好的だった。敬虔な沈黙で聴いてくれて、〔私が発する〕それぞれの言葉と、彼らの知性との間に共感が溢れるのが感じられた。演出も絶妙だったことを付け加えなければならない。華麗に板張りされたホール、上品な家具調度、夜、9時に、暗がりにいる聴衆、数本の蠟燭を置いた1、2個のテーブル、そして自分のテーブルの前で、パパは2つの大きな銀の燭台で――たった一人灯りを浴び――枠に嵌められ、上座に据えられていた。入場時、退場時の拍手喝采は少しも月並みではなく、完璧に如才ないものだった。私の中の稀なものへの愛好家が魅惑されてしまった。〔同上書簡〕

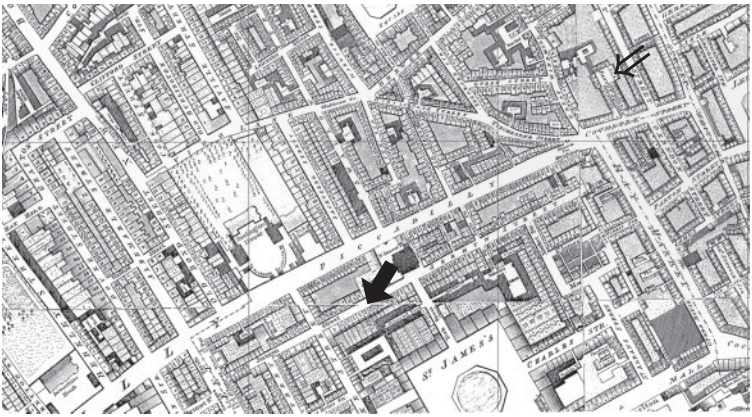
イギリスの大学は、実際、マラルメに深い印象を与えた。そして、ヴェルレーヌの心持とは非常に異なる心持で大学に接しはしたが、中世建築の驚異の中で過ごした牧歌的な生活という同じ印象をもってその地を離れたのだった。特に特別研究員(フェロー)の生活は、彼には考えられる最も理想的なもののように思えた。オックスフォードとケンブリッジ訪問がそうだった「有益なる遠出[14]」を振り返って、彼は――「ヨーロッパと世界で異色の人たちである」――この特別研究員(フェロー)たちこそ、大学の周囲の歴史的な美の「極致と成果」を示すものと結論づけた。彼らの生活は無限に優雅なもののように彼には思えた。彼らは、あらゆる物質的な気苦労から逃れ、精神的な事柄に完全に専念することができる[15]、彼が恐らくそう生きたいと思ったように生きていた。

各学寮の宿舎は、時代から時代へと、これら一群の〔知の〕愛好家たちを隔離してきて、彼らはお互いを継承し、お互いの跡を継いでいく。一人欠員が生じたら「〔ロンドンか、〕どこかの、こんな人(と、彼らが同

意する）が、我々の仲間に加わるだろう」。投票が行われ、彼に招集が発せられる。唯一の条件、それは母校の卒業生でなければならないということだ。彼の人生の残りの間は、自分の聖職給を受け取りさえすればよい。〔それはずっと変わらない。〕イギリスのどこかの景色を窓から毎日眺めたり、大聖堂のように広大な、見事なワイン貯蔵庫の上に建てられた大学食堂に度々行くより前に、いつもの肘掛け椅子に座って、壁に沿って並ぶ書物のうちの1冊を調べること〔もできるが、それ〕よりも、彼はイタリアか、地球のどこかを旅行するほうを好むだろう。そうすれば、彼は自分で選んだ銀行に彼のために用意されている収入を見つけることになる。これらの男たちの大部分は、これら学問の修道院から結婚した男女を締め出す条項を守って、住み込んでいる。……こうした例外的な生活は、その魅力は未だに私に纏わりついて離れないのだが、邪魔されることのない伝統の土壌においてのみ、その全くの優雅さと気高さをもって花咲くことができるのだ。……〈思考〉のために建設された大理石の都市において。〔「有益なる遠出」〕

ヨーク・パウエルは、情況のもう一方の側面が何を持ち得るかを知っていたが、妬み、醜聞、恨みの物語で彼を幻滅させはしなかった。マラルメは、無限に特権を与えられて、彼に生涯重くのしかかった貧困との闘いは何も知らない「何人かの感じのいい紳士たち」だけしか見ていなかった。オックスフォードとケンブリッジは、一方は「堂々としていて」、他方は「こじんまりとして、居心地がよい」〔これらの表現はいずれも「有益なる遠出」〕ところだったが、あらゆる些細な忘れられた苛立ちをただ一つの天に近い都市に一緒に混ぜ合わせた。

それからもう一度、そしてこれが生涯で最後になったのだが、彼はロンドンにいた。――「私があれだけ愛した、そして再び愛するだろうこのロンドン[16]」に。今度はペインの住まいには部屋はなく、ジャーミン街93番地に滞在した。ゴス、ホイブリー、ヘンリーと、会うべき友人がおり、家族のために買うべき干しブドウ菓子があった。乾いた靄を通して太陽は「枯葉の



ジャーミン街 93 番地（⬅）。⇐は、マラルメが最初のロンドン滞在時に
住んだパントン・スクウェア。
出典：『2500 分の 1　ロンドン検索大地図 1792–1897』柏書房、1993 年。

色」に輝いていた。恐らく数箇月前のヴェルレーヌと同様に、彼はソーホーへとこっそり足を運んで、なじみの場所を訪れ、或いはパントン・スクウェアを巡礼し、その背後でマリーが縫い物をしながら泣いて座っており、さすらいの歌手たちにあんなにもよくペニー硬貨を投げてあげるために開けていたあの窓を見上げたことだろう。

彼にとってはまた、それが最後のイギリス訪問でもあった。4 年後の 1898 年、彼は「我が脳髄のやせて、冷たい土地に、徹夜で新たな墓穴を穿つ[17]」ことを容赦なく彼に強要した創作の絶え間ない努力に疲れ果てて、56 歳で亡くなった。

訳者後記

本　論　は Cecily Mackworth, *English Interludes*, London and Boston, Routledge & Kegan Paul, 1974 の末尾を飾る、第 4 章 Lecturing in England: Mallarmé and Verlaine の後半に位置するマラルメを扱った ‘Marble Cities built for Thought: Mallarmé in Oxford and Cambridge’ という小見出しのついた箇所の全訳である。

本書の常としてマラルメのテクスト分析には深入りすることなく、専ら付帯状況の詳細が明らかにされ、評伝風の人間ドラマが展開されている。

晩年にイギリスで行われたこの講演は、マラルメが行き着いた「音楽と文芸」に関する省察を外国人向けに、他のテクストに比べれば比較的分かり易く語ったものであり、それ故にこそ、単行本として出版されはするものの、散文テクストの集大成である『ディヴァガシオン』にそのままの形で収録されることはなかった。謂わばマラルメの詩学を理解する傍系資料となるものだが、この講演は長年親しんだイギリスの友人たちが最後に用意してくれた舞台であり、そこで恐らく詩人は感謝の意味を込め、その反対給付として、晦渋と非難された省察の核心をふと漏らしたとも言えよう。その舞台裏がここに示されている。

ここに至るマラルメと英語圏をめぐる問題は、彼が英語教師を生業としていただけに尚更根が深く決定的なものに違いない。そしてまさにそれ故なのか、英語圏のマラルメ研究者は少なくない。にもかかわらず、この問題がマラルメのテクスト読解に絡めて総括的に解明されてはいないし、そうした総合的な研究も現在に至るまでついぞ出てはいない。

これは我々が今後取り組むべき大きな課題の一つであるに相違ない。その解明に向けて、こうした付帯状況が、もう 30 年以上も前に出た書物とはいえ、イギリスの研究者によって明らかにされたことを確認できたのは私にとって有意義であった。

本翻訳シリーズは、この 6 回目をもって区切りとするが、第 1 回目の「訳者後記」に書いたように、読者として想定しているのは、日本のマラルメ研究者と、マラルメに関心をもつ方々である。これらの人々は、本訳者も含めてその多くがフランス語を主たる研究言語としているだろう。そうした方々により手軽に情報提供をするというのが、この作業の目的であった。私がフランス語以外の言語で書かれた論文を翻訳している意味はそこにある。フランス語ならば恐らく多くの研究者が原文で読み解いてくれるだろうからである。そうした意味から、今後もドイツ語その他の言語で書かれた論文の翻訳紹介にも手を染めていきたいと考えている。

私にとって英語という昔それなりに集中的に勉強した言語とはいえ、第一の研究言語ではないものが相手だけに、これを翻訳するにはそれなりの困難も付き纏い、不明な箇所にぶち当たった折には英語を専門とする先生方の助力を仰いだことも少なくなかった。お名前は一々記すのを差し控えるが、お世話になった方々に最後に厚くお礼を申し上げたい。また、地図の挿入など、面倒な作業を引き受けて下さった慶應義塾大学出版会の奥田さん、渡邊さんにも謝意を表したい。

註（数字は原註、アルファベットは訳註）

1）『音楽と文芸』、ステファヌ・マラルメ『全集』、p.1601.〔訳者が参照した 1979 年版では p.1609.〕の註を見よ。
2）シャルル・ボードレール、『悪の華』中の「万物照応」。
3）ポール・クローデルの 1895 年 3 月 25 日付マラルメ宛書簡。アンリ・モンドール『マラルメ伝』、パリ、1941 年、p.710 からの引用。
4）ポール・ヴァレリー「ラムルー・コンサートにおいて」、『通商（コメルス）』、1930 年、no. xxvi.
5）ヘンリー・ジェームズ『英国時代』、1905 年、p.245.
6）マリアナ・トンプソン「マラルメとイギリスの友人たち」、学位論文、パリ、1954 年（ソルボンヌ図書館所蔵）。
7）『ブラックウッズ・マガジン』、1930 年 4 月号の死亡記事〔p.586〕。
8）トンプソン、前掲論文。〔マラルメ『書簡集』、第 6 巻（Stéphane Mallarmé, *Correspondance, VI*, recueillie, classée et annotée par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Gallimard, 1981）、p.224 の註によれば、「27 日火曜日の午前中まで」滞在したことになっている。〕
9）エルトン、『フレデリック・ヨーク・パウエル』、オックスフォード、1906 年、第 I 巻、p.457.
10）同上、p.158.
11）モンドール、前掲書。
12）パウエルの『音楽と文芸』訳は残念ながら消失している。
13）『音楽と文芸』序文（『全集』、p.642.）。
14）『音楽と文芸』の実際のテクストへの一種の序文である「有益なる遠出」は、一部は「文学基金」という題で『フィガロ』紙、1894 年 8 月 17 日号に、そして一部は『白色評論』誌、1894 年 4 月号に掲載された。
15）「有益なる遠出」。数年早くオックスフォードを訪問していたポール・ブ

ールジェは、特別研究員（フェロー）の牧歌的な生活について同じ印象を持って帰ったのだった。「オックスフォードの興奮（サンサシオン）」を見よ。

16）1894 年 3 月 6 日〔同上『書簡集』、p.239 では「5 日」〕付マリーとジュヌヴィエーヴ宛書簡。

17）〔詩篇〕「苦い休息に倦み疲れて……」。

a）「訳者後記」の冒頭で触れたように、原題は Lecturing in England: Mallarmé and Verlaine であるが、前半の ‘Serious Instants: Verlaine in London, Oxford and Manchester’ と題する項を訳出しなかったため、タイトルを改変し、‘and Verlaine’ の部分を省いた。

b）本論の末尾に出てくるように、『音楽と文芸』が単行本として出版された折に、序として付された「有益なる遠出」の中に出てくる一節である。英訳された原文は ‘Marble Cities built for Thought’ であるが、フランス語原文は ‘la jumelle floraison, en marbres, de cités, construites pour penser’（Mallarmé, *Œuvres complètes, II*, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, p.56.）（思考するために建設された都市の、大理石になった対の花盛り）というふうにもっと複雑な表現になっている。

c）1792 年にロバート・テイラー卿が設立した有名な現代語研究所。

d）シャルル・ボニエ Charles Bonnier 生没年不詳。 オックスフォードのフランス語教師。

e）ヨーク・パウエル Frederick York Powell（1850 – 1904）イギリスの法学者・歴史家。クライスト・チャーチの特別研究員（フェロー）で、1894 年から終生オックスフォード大学の現代史の教授だった。スカンジナビア、ロマンス語圏、ケルト、ペルシャ、マオリ人の歴史・文学にのめり込んだ。その住まいには日本の浮世絵もあったという。1887 年からテイラー・インスティチュートの管理者（キュレイター）の一員になり、フランスやベルギーから多くの作家、芸術家をオックスフォードへ講演のために招聘し、ヴェルレーヌ、ヴェラーレン、ロダンらも招かれた。

f）チャールズ・ホイブリー Charles Whibley（1862 – 1930）イギリスの文学者・ジャーナリスト。1895 年、画家ホイッスラーの義妹と結婚。兄レナードがケンブリッジ大学のペンブロウク・カレッジの特別研究員（フェロー）だった関係で、マラルメをここに招聘したが、ずっと後に彼自身も同じケンブリッジ大学のジーザス・カレッジの特別研究員（フェロー）になっている。

g）レナード・ホイブリー Leonard Whibley（1862 – 1941）ケンブリッジ大学のペンブロウク・カレッジの特別研究員（フェロー）で、ギリシア語、ラテン語の

教授だった。

h)　手紙の宛先はメリー・ローランではなく、ベルト・モリゾである。これは筆者が典拠としたとおぼしきモンドールの『マラルメ伝』、p.677 にも載っているので、筆者の勘違いと思われる。尚、この書簡は同上『書簡集』、p.218、及び『ステファヌ・マラルメ、ベルト・モリゾ往復書簡集』(*Correspondance de Stéphane Mallarmé et Berthe Morisot 1876-1895*, Lettres réunies et annotées par Olivier Daulte et Manuel Dupertuis, La Bibliothèque des Arts, 1995)、p.127 にもあるように、2 月 19 日付と推定されている。

i)　ルイス・ダイアー Louis Dyer（1851－1908）シカゴの医学博士チャールズ・ヴォルニー・ダイアーの次男で、ハーヴァード大学に学び、1874 年、オックスフォード大学のベイリオルに留学。1875 年、「テーラー奨学生」となり、1878 年、ラテン・ギリシア古典学の学士号取得。ハーヴァードの「准教授」としてギリシア語を講じ、1894 年～1895 年、ベイリオルの「非常勤講師」を務めた。マラルメとの接点は、この折にあった。

j)　本紀要、第 46 号、p.140, 註 g）参照。

k)　同上、p.142, 註 s）参照。

l)　イングランド南東部 Greater London と北部で接する州、サリー Surrey にある町。

m)　マラルメ『書簡集』、第 6 巻、p.230 に拠れば、この手紙は、「水曜日午前」すなわち、2 月 28 日付ということになっている。でなければ、註 8）に補った記述とつじつまが合わない。

n)　英訳原文は ‘century-old trees, all lacy now the leaves have gone’（樹齢何百年という木々もあるが、今は葉っぱがなくなって、皆レースのようになってしまっている）となっているが、フランス語原文は ‘des arbres séculaires, avec des tours, dentelées, en le manque de feuillage’（同上『書簡集』、p.230.）である。著者は、‘dentelées’ を ‘dentellées’ と誤解して ‘lacy’ と訳しているものと思われるので、翻訳はフランス語原文に従ってこう訳してみた。

o)　アリドール・デルザン Alidor Delzant（1848－1905）愛書家で、ゴンクール兄弟の伝記作者。妻は文学サロンを開き、マラルメはデルザン家の月曜の夕食によく招かれた。詩人をラムルーのコンサートにしばしば導いたのも彼である。

p)　ウォルター・ペイター Walter Pater（1839－1894）イギリスの批評家・小説家。ロンドン東部の町ステプニーの医師の次男として生まれる。

1858 年、オックスフォード大学のクイーンズ・カレッジに進み、62 年に卒業。64 年、ブレイズノーズ・カレッジの特別研究員（フェロー）となり、瞑想と著作に明け暮れる 30 年を過ごす。彼を特徴づけるのは印象主義で、内面の想像力と鋭い観察とを見事に調和させた〈想像による画像〉という特異な手法に結晶し、同名の短編小説集『想像による画像』（1887）を生んだ。彼が亡くなったのは 1894 年 7 月 30 日だから、マラルメと会ったのはその僅か前のことだったことになる。

q）英訳原文は ‘dress quietly and just anyhow, as you often do.’ であり、著者が典拠にしたと思われるモンドールの伝記、p.678 には ‘habille-toi sagement sans bonhommerie, comme souvent.’ とある。だが、‘sans bonhommerie’ というのは意味がわかりかねる。*Documents Stéphane Mallarmé, III*, présentés par Carl Paul Barbier, Nizet, 1971, p.237 には ‘sans haulonnerie’ となっていて、これまた意味不明である。これらを踏まえて、上掲の『書簡集』、第 6 巻、p.234 では ‘sans hanlonnerie’（下線による強調はいずれも訳者）と訂正されている。その註によれば、「Hanlon Lees 兄弟という有名なパントマイム俳優のようなかっこうではなく」という意味らしい。これらは英訳では見事に訳し落されていると言えよう。

以上、人名に関しては、マラルメ『書簡集』の註、及び集英社『世界文学事典』の記述のエッセンスをまとめた。

この翻訳シリーズを締め括るに当たり、私が把捉し得た範囲で、誤植と補註を掲げ、局所しか示し得なかったために全体の中の位置が明確でないきらいがあったロンドン全体の地図と、これまでに掲げた地図の、その中での凡その位置を可能な限り本稿末尾に示したので参照されたい。

ERATA ET SUPPLÉMENTS AUX MUMÉROS PRÉCÉDENTS

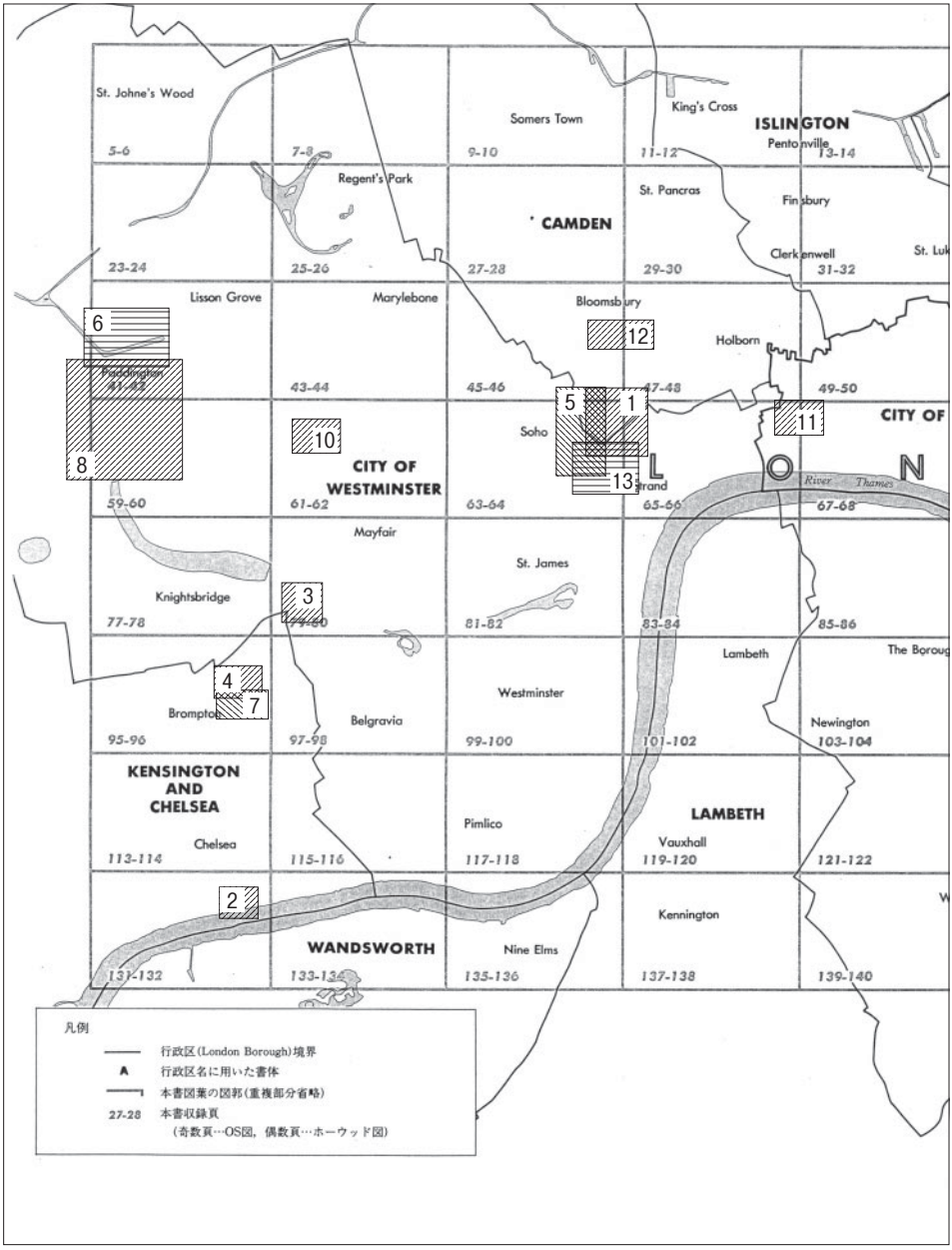
・セシリー・マクワース「若きマラルメ」(2)(翻訳)、『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』、第 43 号
p.53, 23 行目　「1862 年 5 月 4 日」→「5 月 24 日」
p.60, 19 行目　「The French Square」→「The French Quarter」
23 行目　「興味など」→「好みなど」

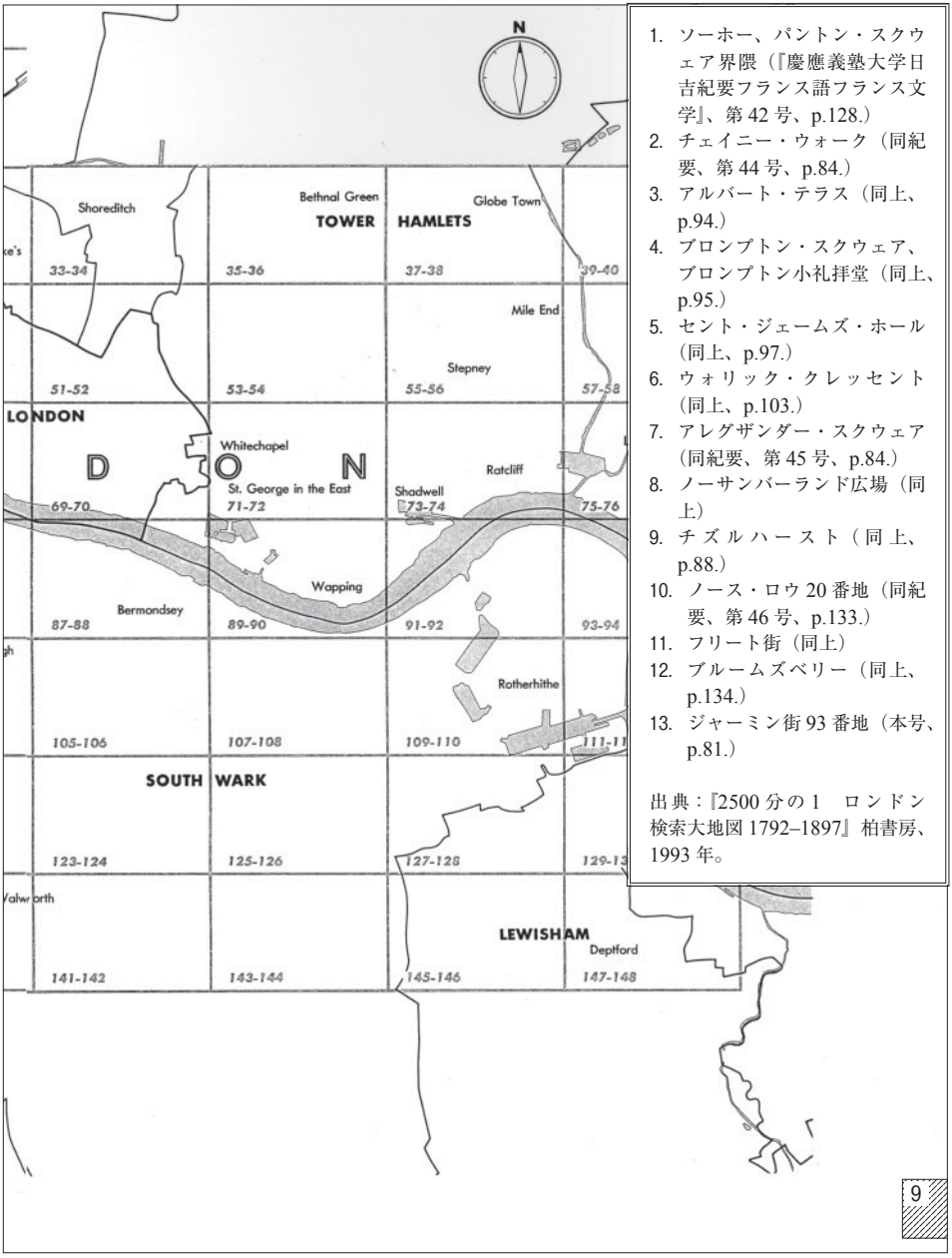
・同 (3)、同紀要、第 44 号
p.97　地図　「マラルメはが」→「マラルメが」
p.103　地図、9 行目「ウォーウィック・クレッセント」→「ウォリック・クレッセント」

・同 (4)、同紀要、第 45 号
p.96, 19 行目　「繋栄下」→「繁栄下」

・同 (5)、同紀要、第 46 号
p.138　註 4) 出版社→出版者
p.139　註 b 「リチャード・ヘンギスト・ホーン」の後に「Richard Hengist Horne」と入れる。
p.141　註 n → n)
p.142 「『書簡集』の註を参照されたい」としたが、このエッセンスをここに記す。
p.135　テオ・マーズィアルズ Theophilus Jules Henri Marzials (1850 – ?) ブリュッセルに生まれ、ベルギー、スイス、イギリスで学び、1870 年に大英博物館に就職。著書に『鳩のギャラリー、その他の詩』(1873)、『エスメラルダ (オペラ)』(1890) がある。
p.135　リチャード・ガーネット Richard Garnett (1835 – 1906) イギリスの文学者で、大英博物館の図書館司書。シェリーの詩の出版、批評研究のほか、オショーネシーに関する記事を『国民伝記事典』に書いた。1875 年には、学芸員助手に任ぜられ、読書室の管理を任されたばかりだった。
p.135　サイラス・レディング Cyrus Redding (1785 – 1870) イギリスのジャーナリスト。1815 年〜1818 年、『ガリニャーニズ・メッセンジャー』の発行人。フランス・ワインに造詣が深かった。

他にも誤りがあろうかと思う。下記へ忌憚のないご意見を賜りたい。
バック・ナンバーの請求も下記まで。
harayama@wc4.so-net.ne.jp


St. Johne's Wood
5-6
7-8
Regent's Park
Somers Town
9-10
King's Cross
11-12
ISLINGTON
Pentonville
13-14
23-24
25-26
CAMDEN
27-28
St. Pancras
29-30
Finsbury
Clerkenwell
31-32
Lisson Grove
Marylebone
Bloomsbury
Holborn
Paddington
41-42
43-44
45-46
47-48
49-50
CITY OF
Soho
CITY OF WESTMINSTER
59-60
61-62
63-64
65-66
67-68
River Thames
Mayfair
St. James
Knightsbridge
77-78
81-82
83-84
85-86
Lambeth
Westminster
Brompton
Belgravia
95-96
97-98
99-100
101-102
Newington
103-104
KENSINGTON AND CHELSEA
Chelsea
113-114
115-116
Pimlico
117-118
LAMBETH
Vauxhall
119-120
121-122
Kennington
WANDSWORTH
Nine Elms
131-132
133-134
135-136
137-138
139-140
1
2
3
4
5
6
7
8
10
11
12
13
凡例
行政区(London Borough)境界
A 行政区名に用いた書体
本書図葉の図郭(重複部分省略)
27-28 本書収録頁
(奇数頁…OS図，偶数頁…ホーウッド図)



1. ソーホー、パントン・スクウェア界隈（『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』、第 42 号、p.128.）
2. チェイニー・ウォーク（同紀要、第 44 号、p.84.）
3. アルバート・テラス（同上、p.94.）
4. ブロンプトン・スクウェア、ブロンプトン小礼拝堂（同上、p.95.）
5. セント・ジェームズ・ホール（同上、p.97.）
6. ウォリック・クレッセント（同上、p.103.）
7. アレグザンダー・スクウェア（同紀要、第 45 号、p.84.）
8. ノーサンバーランド広場（同上）
9. チズルハースト（同上、p.88.）
10. ノース・ロウ 20 番地（同紀要、第 46 号、p.133.）
11. フリート街（同上）
12. ブルームズベリー（同上、p.134.）
13. ジャーミン街 93 番地（本号、p.81.）

出典：『2500 分の 1　ロンドン検索大地図 1792–1897』柏書房、1993 年。